

研究種目：基盤研究(C)  
研究期間：2007～2010  
課題番号：19530601  
研究課題名(和文) <けんか>についての認識の発達の多様性：幼児期3年間の縦断的研究  
研究課題名(英文) The Development of Preschool Children's Views about Conflicts with Peers: Longitudinal study from Four-Year-olds to Six-Year-olds  
研究代表者  
久保 ゆかり (KUBO YUKARI)  
東洋大学・社会学部・教授  
研究者番号：10195498

研究代表者の専門分野：発達心理学、社会性の発達

科研費の分科・細目：教育系心理学

キーワード：いざこざ、幼児期、縦断的研究、インタビュー法、参与観察、感情調整

### 1. 研究計画の概要

社会性の発達を捉えようとするとき、他者と自分の要求が対立するといった、他者とのコンフリクトに対して建設的に対処していく力の発達について検討することが決定的に重要である。本研究では、けんかやいざこざといった、子ども同士のコンフリクトに対処していく力の発達に焦点をしばり、検討していくことにする。とりわけ、コンフリクトについて語ることに注目する。というのは、ある事柄について語ることは、言語的に表象し自覚化することであり、それはその事柄に対する柔軟な調整を可能にすることにつながるからである。そしてそれは、対人場面におけるネガティブな感情を調整する力を育むことにもつながっていると考えられる。

具体的には、社会性の発達の礎が作られる幼児期にある子ども達を対象として、幼稚園・保育園の3歳児クラスから5歳児クラスまでの3年間における発達を捉えていく。子どもが所属している園のクラスにおける〈けんか〉についてインタビューをおこない、日常生活場面での〈けんか〉についての認識を取り上げて検討することにする。そして、その子どもたちの1年後、2年後を追い、縦断的にインタビューを実施することによって、〈けんか〉についての認識の発達の基本的な方向性を明らかにするとともに、個々人の認識の多様性を明らかにし、そのような認識が発達していく道筋の多様性について明らかにすることを旨とする。

### 2. 研究の進捗状況

幼児は、仲間との〈けんか〉をどのように捉えているのかについて、2007年度に4歳児

たちに対してインタビュー調査を開始した。その子どもたちの1年後・2年後を追って、2008年度と2009年度に、同様のインタビューを実施し、4歳時点から6歳時点への発達の变化を縦断的に検討した。具体的には1対1のインタビューをおこない、(1)〈けんか〉についての概念的および実質的な認識を尋ねる質問と、(2)手続き的な知識を尋ねる質問をした。質問の例は次の通りである；質問(1)「〇〇組で、〈けんか〉になること、あるかな？」、「どうして〈けんか〉になるのかな？」「そういうときには、どうしたらいいのかな？」。質問(2)「人形を2体用意して、物の取り合いを演じて見せて、対処の仕方について尋ねた。『貸して』、『ダメ！』になっちゃったね。こういうとき、どうしたらいいかな？」、「そのあとは、どうなるかな？」。また、週1回、自由遊びを参与観察し、いざこざも含め子ども同士のやりとりをフィールドノートに記録した。

その結果、4歳時点では〈けんか〉になることはないと答えることが多く見られたが、1年後の5歳時点では、〈けんか〉になることがあると答えることが見られるようになった。ただし、その内容は紋切り型であり、対処の仕方については「わからない」と答えることが多く見られた。さらにその1年後の6歳時点では、〈けんか〉の内容は具体的で多様なものが語られるようになり、対処の仕方についても、「謝罪」、「交渉」、「第三者による仲裁」などといった多様な方略が語られるようになった。

そこから4歳時点から5歳時点への変化として、〈けんか〉についての手続き的な知識が言語により表象され、より一般化されて

いくという経路がある可能性が示唆された。  
さらに、5歳時点から6歳時点への変化として、〈けんか〉についての言語による表象がより多様になり、〈けんか〉の対処方略についてもより多様に表象されていくという発達経路がある可能性が示唆された。

### 3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

理由：(1) 3歳児クラスの時点で調査に参加した子どもたちのうち、5歳児クラスまでの3年間に亘り調査を継続できた割合が約7割あり、縦断的な分析が可能なデータ数を確保できている。(2) インタビュー調査において、ほとんどの子どもたちは興味・関心をもって参加していたと見受けられ、質問等が子どもたちにとって適切なレベルと内容であったと評価できる。

### 4. 今後の研究の推進方策

(1) 2009年度末までに収集できた縦断的なデータに対して、事例を補充していく。  
(2) 4歳時点から6歳時点への変化について、パターンの多様性をより詳細に分析する。  
(3) 自由遊びの参与観察フィールドノーツを活用し、特に感情調整のありかたとの関連を質的に分析する方法を探る。

### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 久保ゆかり 幼児期における情動調整の発達—変化、個人差、および発達の現場を捉える— 心理学評論、掲載確定、査読有
- ② 久保ゆかり 幼児の感情理解の発達を捉えるインタビュー法—感情生活者としての子ども一人ひとりと出会う— 東洋大学社会学部紀要、31-46頁、2009、査読無

[学会発表] (計5件)

- ① 久保ゆかり 幼児期における〈けんか〉への対処についての認識の発達—5歳時から6歳時への変化の多様性— 日本発達心理学会第21回大会、2010/3/27 神戸国際会議場
- ② 久保ゆかり シンポジウム「教育における情動」にて話題提供 『園生活における感情』 日本教育心理学会第51回総会、2009/9/22 静岡大学
- ③ 久保ゆかり 怒りの表出機能についての認識の発達—インタビューと参与観察による5歳から6歳にかけての縦断

的研究、日本教育心理学会第50回総会、2008/10/12、東京学芸大学

- ④ 久保ゆかり ワークショップ 107「質的データはどのように有効か？」の話題提供者、日本心理学会第72回大会、2008/9/21、北海道大学
- ⑤ 久保ゆかり シンポジウム「関係性のなかの発達を捉える—「長い目」と「広い目」—」の企画・司会者、日本心理学会第71回大会、2007/9/19、東洋大学

[図書] (計3件)

- ① 久保ゆかり 4章 幼児期の感情 4節 「感情調整の発達」 In 上淵 寿(編) 『感情と動機づけの発達心理学』ナカニシヤ出版 (野田淳子との共同執筆。久保執筆部分は、74-84頁) 2008/4/20
- ② 久保ゆかり 6章 児童期の感情 In 上淵 寿(編) 『感情と動機づけの発達心理学』ナカニシヤ出版 (丹羽さがのとの共同執筆。久保執筆部分は 105-115頁) 2008/4/20
- ③ 久保ゆかり 感情の理解の発達 In 高橋恵子・河合優年・仲真紀子(編著) 『感情の心理学』 放送大学教育振興会、2007/4/1、113-124頁

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]

特になし